

「ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流交換構想」に係る
活用イメージに関する懇談会（第1回）【議事録】

日時：令和2年3月13日（金）13:30～16:45

場所：北海道博物館 講堂

（所課長）まだ早いですが、皆さん席につかれたようなので、始めさせていただきたいというように思っております。

私は、担当しています北海道文化局文化振興課長の所でございます。よろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中、また、マスクの着用等をお願いするような状況の中、第1回懇談会にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

資料の3になりますけれども、今回の懇談会開催要領にあります、このエリアの空間構想、ここに係る具体的な活用イメージをつくる懇談会とさせていただきまして、全体で3回予定しております。よろしくお願いいたしますと思います。

それでは開会にあたりまして、文化局長の小出からご挨拶申し上げたいと思います。

（小出局長）文化局長の小出と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、年度末のご多忙の中、この活用イメージ策定に係る第1回懇談会にお集まりいただきまして、厚くお礼申し上げます。

道立自然公園野幌森林公園に所在します、北海道博物館、開拓の村、百年記念塔は、北海道百年記念事業の一環としまして整備された施設であります、施設が整備されてから50年が経過し、施設の老朽化や利用者数の減少など課題が生じてきたところでございます。

そうしたことから、道民のご意見や専門家の意見を幅広く意見をいただいた上で、各施設に周辺の自然豊かな地域を含めましたエリア全体を対象に、再生に向けた「ほっかいどう歴史・文化・自然「体感」交流空間構想」を一昨年の12月に策定したところでございます。

この構想の実現にあたりましては、当初、実現可能なものから順次取り組むこととしておりましたが、その後、構想の推進にあたりまして、様々なご意見がありまして、「エリア全体としての具体的な活用の方向性」を示す「活用イメージ」をとりまとめることとした次第でございます。

そして、この「活用イメージ」をとりまとめるにあたりまして、各分野の専門的な意見が必要となりますことから、この度、有識者で構成します懇談会を設置させていただき、本日、皆様にお集まり願ったところでございます。

後ほど、事務局から説明いたしますが、この活用イメージを策定した後は、開拓の村などの個々の施設におきます具体的な方針を検討していく際の基本的な方向性を示すものとなります。

皆様には、ぜひ活発なご意見をいただくよう、お願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが、開会にあたりましての挨拶とさせていただきます。
本日はどうぞよろしく願いいたします。

(所課長) 続きまして、本日参加いただきました委員の皆様方を、ここでご紹介させていただきたいと思
います。

北海道博物館館長の石森修三様です。

(石森座長) 石森です。よろしく願いいたします。

(所課長) NPO 法人歴史地域資産研究機構代表理事の角幸博様です。

(角委員) 角です。よろしく願いいたします。

(所課長) 酪農学園大学教授の金子正美様です。

(金子委員) 金子です。よろしく願いします。

(所課長) 北海道観光振興地域観光部長生川幸伸様です。

(生川委員) 生川と申します。どうぞよろしく願いいたします。

(所課長) ニトリホールディングス小樽芸術の村総支配人の天池風太様です。

(天池委員) 天池です。よろしく願いします

(所課長) アトリエ・モリヒコ社長付きディレクター菅井研様です。

(菅井委員) 菅井と申します。よろしく願いいたします。

(所課長) 北海道開拓の村館長中島宏一様です。

(中島委員) 中島です。よろしく願いいたします。

(所課長) これから会議を開催いたしますが、開催要領の4 (2)、資料の3でございますが、「懇談会に
座長を置き、文化局長が指名する。」と定めてございます。

座長につきましては、文化局長から石森委員にお願いしたいというふう聞いてござい
ますので、どうぞよろしく願いいたします。

(石森座長) 誠に僭越ですが、ご指名に預かりましたので懇談会の進行役としての座長を引き受けさせていただきます。皆様方、是非ともよろしく願います。

(所課長) ありがとうございます。よろしく願います。

それではまず、本日の日程について、ご説明をさせていただきます。

この後、若干短くなりますが、15分程度、この構想ですとか、活用イメージに係る説明をさせていただいた後、実際に、開拓の村、百年記念塔、博物館の現地視察をしていただきたいと思います。

その後、もう一度この講堂に戻りまして、15時35分位を目処としておりますが、1時間程度、皆様で意見交換を行っていただきたいと思いますというふうに思っています。

終了は、16時45分を目処と考えてございますので、よろしく願います。

それでは座長、願います。

(石森座長) それでは本日の議題に入らせていただきます。

まず「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」に関しまして、「構想策定までの経過」並びに「構想の内容」につきまして、まとめて事務局から説明を願います。

(所課長) それでは引き続きまして、私の方から説明をさせていただきます。

お手元の方に、カラーで印刷になっている構想の概要とですね、空間構想の本体版があると思います。この構想の策定経緯についてお話をさせていただきたいと思います。

この野幌公園エリアには、ご存じのとおり、北海道博物館、開拓の村、記念塔など、北海道百年記念事業の一環として整備された施設がございます。

当然、百年年記念事業ということで、建設から50年経ってございまして、先ほど局長からの話もありましたが、老朽化或いは利用者の減、こういった課題が生じてきているところでございます。

こういった施設、そうはいいながらも貴重な財産でございますので、次の世代にどういうふうに引き継いでいくのかということで、平成28年度から有識者の方々に集まらせていただきまして、検討を重ねてきたところでございます。

平成29年には百年記念施設の活用に関する考え方というものもとりまとめたところでございます。

その後、平成30年になりますと、道民ですとか、専門家の方々が幅広い意見、或いはパブリックコメントや道議会での議論、こういったものを踏まえまして、都合全部で3年間位かかりましたが、北海道歴史文化自然「体感」交流空間構想、これを平成30年、一昨年12月に策定したと、こういう経緯になってございます。

その構想の内容でございます。概要版にありますように、この施設につきましては、基本的に構想では、施設ごとに、50年後の目指す姿、今後の方向性、具体的な取り組み、この3点を

中心に記載をさせていただいております。

基本方針といたしましては、概要版の一番下のところに書いてございますけれども、施設ごとの点ではなく、このエリア全体の視点も含めて、エリア全体を対象といたしまして、歴史、文化、自然、そういったものを体感するという事で、国内外から訪れる人々との交流、そういった賑わいのある空間、そういったものとしての再生、こういったものを満たすというふうにさせていただいております。

それで施設ごとしてというのが、概要版の裏側の方に載っているのが、まとめているものがございますが、北海道博物館ですと、北海道としての中核的な博物館として、或いは道民参加型の博物館として魅力向上に努めていく。

さらには、今年、ウポポイも開設いたしますが、そういった役割分担なんかも考慮しながら連携を図っていく。こういった方針になってございます。

或いは開拓の村につきましては、博物館として役割は当然ございますが、そういったものを基本としつつも、国内外から旅行者、こういったものをターゲットにした観光拠点、或いは古民家再生等の人材育成の場、こういったものとしての活用を目指していきたい、こういうふうに整理をしたところでございます。

百年記念塔、塔前広場につきましては、百年記念塔はこの後見ていただきますけれども、やはり安全性、将来負担の関係がございますので、解体もやむを得ないと判断させていただいております。

その後、そこに新たなモニュメントを配置して、交流空間としていきたいということで考えてございます。

新たなモニュメントは、これまでの思いを引き継ぐようなものにして、将来の北海道を象徴するものとしていきたい。

そして、これまで存在してきた記念塔に関しましては、思い出・記憶、そういったものを保存するような企画、こういったものやしていきたいということで考えてございます。

そして、野幌森林公園ですとか、近隣の施設につきましては、やはりこの良好な自然環境がございますので、そういったものを当然保全するということはもちろん、安心して利用できるような環境づくりと、こういったものを進めていきたい。

そして、周辺の文化・スポーツ、こういった施設と連携をすると、こういった方針を立てているところでございます。

以上が経過と内容でございます。

(石森座長) ただいまの事務局からの説明につきまして、何かご質問等がありますでしょうか。

無いようでしたら、時間も限られていますので、続きまして、「活用イメージ」につきまして資料に基づきまして、事務局から説明をお願いします。

(所課長) 引き続きまして、A4横の資料6のペーパーに基づきましてお話をさせていただきたいと思っています。

これが本日ご議論いただきたい活用イメージの作成についてでございます。

先ほどの局長の挨拶にもありますけども、この構想の取り組み、こういったものを具体的に進めていくために、エリア全体の方針、具体的な活用イメージ、これを少し整理していきたいというふうに思っています。

そこにご意見をいただきたいということでございます。

先ほど私の方からも交流空間構想、点ではなく面という形でお話させていただきました。

交流空間構想を一番左側に書いてございます。先ほど言ったように施設ごとに博物館、村、記念塔、公園というふうにありますけども、構想をよく読みますと、正直、点ではないと言いつつも、施設単位にどうこうしていくっていうような記述がメインになっておりますが、博物館はこういうふうにしていこう、開拓の村はこうしていこうという形で、エリア全体を通したテーマ性といいますか、共通概念といいますか、そういったものが若干ちょっと記述しては、薄かったのかなというふうに思っているところです。

それを補完する形で、このペーパーの真ん中の検討の視点でございますが、エリア全体としての魅力、要するに施設ごとの縦とするのであれば、横串を刺すような形で、テーマを設定して、エリア全体の考え方っていうのを整理していきたいというふうに思っております。

それで、今日も含めまして、3回を通じまして、テーマごと施設横断的に色々ご意見をいただきたいというのがこの会の趣旨でございます。

それで、我々は考えるテーマとしましては2つ大きくございます。

テーマの1つ目が、賑わいのある空間、具体的に言いますと、観光・食というようなくくり。

もう1つテーマが道民・地域への還元、こういったテーマで、各施設横断的なところを少し整理していきたい、具体的な内容を出していきたいというふうに思っております。

そして、今ある空間構想と、今回の検討を合わせていきますと、一番右側の完成イメージでありますけども、そういったものをさらにもう一度、施設ごとの計画にフィードバックしていくというようなことを考えていますので、よろしくお願ひしたいと思います。

それで、検討の視点のところでございます。

まずテーマ1、観光・食、ここはあくまで例示ということで考えて欲しい。これを具体的にやらないといけないことではなく例示と考えて欲しいんですが、観光ですと、やはり展示建造物、こういったものを有効活用していくんだらうということでございます。

有効活用というのは、そういったものを使って、例えばカフェですとか宿泊体験ですとか、そういったものができないだらうか。

そして、次はベーシックなところになりますけども、受入の基盤といいますか、ガイドですとかキャッシュレス化ですとか、或いは情報発信につきましても、施設から発信だけでなくて来た人に発信してもらう。

そういった仕掛け、或いは当然公園もありますので、自然との連携、自然探索、こういったものの。

そして1日楽しめるということで、各施設だけだと半日もかもしれませんけれども、エリア全体では1日楽しめる、そういったような展開、モデルコースみたいな感じですね。

それと、当然、そういった魅力ある空間としてのオリジナルグッズ、そういったものの開発ですとか、そういったことはどうなんだろうかという形で例示をさせてもらっています。

食でいきますと、キッチンカーですとか、ファーマーズマーケットという形で、幅広い食の展開、或いはこれまで、どちらかという施設の中に入ってから食ってという感じでしたけど、食事だけを楽しみにくるっていう方も受けるような展開。

そういった食の提供という中では、民間とか学生とかっていう方々のご意見を取り入れ、或いは直接、食堂とか売店っていうことについては、そういう専門業者に思い切って任せてしまう、こういったようなことを例示として上げさせていただいております。

そして、テーマの2、道民、地域への還元でございますが、当然インバウンドも大切でございますけれども、やはり地元の方々、こういった人々を大切にしていく視点も欠かせないだろうということで、道民割引の導入ですとか、道内児童、子供たちの利用拡大で更なる修学旅行生の獲得、スポーツ利用での、例えば、ふれあい交流館による用具の貸し出し、例えば、冬だったら歩くスキーですとか、そういった用具の貸出、そして、これはどちらかという塔前広場、百年記念塔の跡地の利用といったことになるかもしれませんが、子育て世代が集まれるようなスペースとしての活用、こういったことを例示させていただきました。

ただ一方で、道財政非常に厳しいということも、また現実でございますので、そういったものを、当然、道も併せて、民間活力を導入するというところで、どういうふうにしたら、民間のノウハウですとか、資金を投入したらいいのか、そういったテーマに沿った内容、民間活力の導入の手法、方法、こういったところについて、幅広くご意見をいただけたらな、というふうに思っているところでございます。以上でございます。

(石森座長) ただいま活用イメージにつきまして説明いただきました。この活用イメージにつきましては、本日、皆様方に関連施設を視察していただいた上で、それぞれなりのお立場で、ご意見、ご提案をいただく段取りになっています。そのため、先ずただいま事務局から説明いただいた活用イメージの資料について、何か質問等があれば、いただきたいと思っております。

(なし)

ご質問等が無いようですので、ただ今から北海道開拓の村と百年記念塔並びに北海道博物館の関連施設の視察を行いますので、よろしく願いいたします。

<施設視察>

(石森座長) 野幌森林公園は、北海道百年記念事業の一環として、1968年に道立自然公園として指定されました。札幌市、江別市、北広島市の3市にまたがる丘陵地に広がっており、貴重な自然林の保護育成と道民への自然に親しむ休養の場の提供を目的にしています。2,053haの面積のうち大部分は国有林で、昭和の森・自然休養林や鳥獣保護区に指定されています。

次いで、1971年に開館した「北海道開拓記念館」と1994年に開所しました「道立アイヌ民族文化研究センター」が統合して、2015年4月に新たに「北海道博物館」が開設されました。

さらに、「北海道開拓の村」は、北海道の明治～昭和初期の歴史的建造物を移築復元・再現した野外博物館として1983年に開村しました。「自然ふれあい交流館」は、道立自然公園である野幌森林公園のビジターセンターとして2001年に開館しています。

本日視察していただきました野幌森林公園内に設置されています北海道博物館や野外博物館・北海道開拓の村などは、北海道ならびに北海道民にとりまして貴重な財産であります。これらの諸施設をさらにより良く活用を図るために、皆様方から様々なご意見やアドバイスをいただくのが、本日の懇談会の最も重要なポイントであります。

事務局が想定しています活用イメージのテーマは、大きく分けて2つあります。第1のテーマは「賑わいのある空間」でありまして、野幌森林公園エリア全体でいかに賑わいのある空間をつくっていくことができるかがポイントであります。

第2のテーマ2は、「道民、地域への還元」でありまして、道民や地域に対していかなるかたちで様々な還元方策を考えていけば良いか、ということがポイントになります。

それでは先ず「賑わいのある空間」ということにつきまして、天池委員に口火を切っていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

(天池委員) はい。私は小樽の方ですね、小樽の芸術の村という美術館を続けてさせていただいておまして、小樽の芸術の村はですね、2016年の7月23日にですね旧荒田商会、旧高橋倉庫といわれる、小樽の条例に基づく歴史的建造物に登録されていた建物を活用してですね、ステンドグラス美術館と、今はちょっとないんですが、アールヌーヴォーグラス館という2つのガラスを使った工芸品の美術館を、2016年にオープンさせまして。

そこを皮切りに、2017年度には、漢字で似鳥美術館という、これも旧北海道拓銀小樽支店を活用させていただいた美術館と、どちらかといえば資料館的な要素が強いのですが、旧三井銀行小樽支店の資料館の形をさせていただいて、それが2017年でございまして。

2018年には似鳥美術館の中にですね、アメリカの、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、宝石のティファニー社の長男の方、ルイスカムフォートティファニーがつくったステンドグラスのギャラリーを200坪位なんですがつくらせていただいて、去年はさらにフランスのステンドグラスを、三井銀行の方に仮設なんです飾らせていただいて、3館全部ステンドグラスという状況をつくってですね。

小樽はガラス街ということもありまして、約100年前位に建てられた建物の中に、100年前にヨーロッパ、アメリカ、世界各国で作られたステンドグラスを飾っているという状況をつくりながら、さらに先ほど申し上げた似鳥美術館の中には、近代美術を中心とした工芸品、絵画を飾らせさせていただいた上で、小樽芸術の村というようなことをさせていただいております。

小樽芸術の村は、資料とか持ってきていなかったのですが、3年か4年目になるんですが、3年間やりまして、最初ステンドグラス美術館だけで10万7千人位ですかね、1年間で1年目ということでご来館いただいて、グランドオープン後の2年目は20万4千人位入っていただきまして、去年2019年の3年目は25万3千人位入館、利用していただきまして、施設、面積が増えていったので単純にお客様が増えていったところでございますけれども、やはり、この3

年間、4年間、現場で一緒に美術館的なことをやらせていただいた中で感じたのは、やっぱり小樽の街の特性というのをしっかり活かしながら、そこにくるお客様を或いは観光客の方々に入館していただいて、文化、歴史、芸術を感じてもらって、入った時は、何ていうんですかね、「こんなところに美術館があったんだ」って入ってもらうだけけれども、帰った時には「良い美術館だったな」っていうふうに帰ってもらおうので。

我々の仕事の方で、そんな大々的にアピールしている、宣伝もしていないですし、ニトリホールディングス的にはCSR活動の一環でございますので、そんなに予算もついているところではございませんので、大々的に何か宣伝したことはないのですが、小樽という観光都市という特性を利用しながら、元々あまり小樽の中には観光のハードがないとずっと言われていました。

色内という街に我々の小樽美術館があるのですが、堺町といういわゆる北一硝子とかある方にはお土産屋さんとかもいっぱいありまして、観光客の皆様の非常に多いということもあって、それをさらに北側の色内の方まで我々が進出したことによって、引き延ばしに成功していると。

そして我々は美術館なので、あまり海外のインバウンドのお客様に大々的に宣伝しているわけではないので。入館の比率でいうと、大体10パーセントいくかないか、7〜8%位かな、海外のお客様、中国人など。

ほとんどのお客様が日本人でありまして、そういった意味では、小樽に日本人の観光客の方を戻したといいますか、定着させた、そういったことでは、小樽市からも感謝されています。

海外の方ばかり増やしたということではなくて、日本人のお客様も戻しているということで小樽の街の方には感謝されていることございまして。

ですから、今回一緒に視察させていただいて、それぞれ素晴らしい施設でありましてですね、唯一無二の存在のかなっていうふうにはすごく感じたんですけども、やはりどこにターゲットを置いて、どういうふうにお客様を入れるのか入れなくてもいいのか、入れる必要があるのか。

あとは、どのように今後50年目指す姿というのを施設ごとにと書いてありますので、50年後、どういうふうになっていきたいのかっていうのも描きながら、そこから逆算で、何が手がけられるかっていうのは考えなきゃいけないなというふうには思いまして。

あと今後の方向性というところでも、観光客を入れることを目指すのか、それとも地域の住民の方、北海道民、札幌市民の方に頻繁にきてもらう方向に行くのか、観光客を取り込むのか。

それによって結構具体的な取り組みが変わってくるのかなと。それで、やはり、あまり予算もおそらくないでしょうし、これからいろんな枠組みをつくっていろんな民間も含めて参加できるような枠組みを、北海道庁さんが色々努力されながらつくっていくんだろうと思うんですけども、限られた予算をどこにどう使うというところが非常に重要ななと思っておりますね。

ですから、各施設の博物館、開拓の村、塔、公園とありますけど、段階的だと思うんです

が、一番最初にやらなきゃいけないのは、ある程度力を集中して、そこに、ある程度の力点を置きながら、観光客を取り込むのか、北海道民、札幌市取り込むのかという方向性はある程度、お話の中で決めながらですね、集中していった方がいいかなというふうにはすごく感じました。

広いですし、建物も大きいし、移動距離も長いです。全部一気にというのはなかなか厳しいしいかなとそういう風に感じましてですね。

ただ、個々の建物は素晴らしいですし、非常に考えられていますし、非常に魅力的な北海道唯一の場所じゃないかなと思って、うまく活用できればいいんじゃないかなと感じました。

ですから、我々がやっている小樽の芸術の村というのは、小樽は特性としては先ほど申し上げた観光都市なので、人口が11万6千人位しかない街なのに、観光客は一応750万～760、70万人来ているというふうに想定している街なので、圧倒的に観光客の方が多いい街でございます。

そういった意味で特性は、観光、美術館、その中で、小樽市に参加いただけるような試みであったり、対策というのをしておるんですがね、それを力点としてはどこに置くべきなのか、皆さんとお話し合いをしながら、良い方法を考えられると良いなと思ひまして。

あとは、食というのは、考えようによっては色々できそうだなと。道内各地の建物とか、開拓の村さんについては来ておりますんで、それぞれでそういう何か特色を出していくのか、そういうことは考えられるかなと思ひまして。

博物館さんは、本当に素晴らしい展示で、小学校3年生位ですかね、まだ記念館の時に来たような記憶で。写真も残っているんで来たんだなって思ひますが、実際最近来ると本当に、その時とは全然違う展示であったり、分かり易く、そこは本当に素晴らしくなっていて。

あとは正直、私は北海道出身なんですけど、10年間大阪の方に会社の仕事でいたんですけど、帰ってきて、北海道博物館を見させていただいて、こんな博物館が北海道にあるんだということに本当に正直驚きまして。

そこは宣伝なのか、もっと知ってもらえることによって、色々来たいと思う人も増えるんじゃないかと思ひまして。

そういった意味では、いろんな力を集中させて、どこから着手するのかというのをしっかり描きながら、話を進めていければ、すごい発展の余地はあるというふうに思ひました。以上です。

(石森座長) 最初から貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

続きまして、角委員にお願いいたします。

(角委員) 先ほど、建物群、それから博物館を見せていただきましたら、何十年かぶりに塔の上まで登らせてもらいました。塔の上までよく登ったなという感じになって。

ちょっと順番が違ふかもしれないのですが、百年記念塔と言ひながら、50年でこれをどうするかということを考えなきゃならないということに、これは色々な意見があつて。

当然、安全性のことから言うと、解体やむなしという話も出ていますが、実は建築家協会の有志の人達だとか、それから地域の高校生を中心とする子供たちからですね、原風景を何とか残して欲しいということもあったり、それから、実は百年記念塔の設計者まだご存命で、ご本人はそんな壊れるわけがないと頑張っているわけですけども。

いずれにしてもですね、建物を今後どうするかということをやっぱり丁寧な、説明責任があるんだろうなと思うんですね。

ここにさらっと解体から新モニュメント設置とか、思いと保存とか書かれていますけども、多分あれが建てられた時の、この地域全体の計画の中で、どういう意味を持っていたのかということも含めて、確か東大の高山研究室で、ここの全体の地域計画を立てられて、その報告書も、確か私のところにも昔のやつがあると思うんですけども、そういうのを見ていくと、今日のテーマであるこの全体のエリアをどうするかというところ、もう一回原点に立ち戻って、いろいろ検討して、何が足りなかったのか、そして何が逆にその当時と状況が違うのかという分析していく必要があるんじゃないかなと感じました。

それから、この記念館、博物館、皆さん先ほど見ていただいて、それから説明の方もおっしゃっていただけれど、この建物自体のその価値をもっと高める、高めたいという話で。当然50年過ぎていきますんで、将来的には登録有形をするなど。

皆さんもご存じのように、建築学会の作品賞にも、北海道で2つ、1つ旭川市庁舎がどうなるかわからないんですけども、2つのうちの1つですね、

そういう意味では、ある意味建物自体の評価っていうのも、もっとこう宣伝してもいいし、もちろん博物館ですので、博物館の展示そのものの意味もあるんですが、それを収蔵している単なる器ではなくて、その時期どういうことが考えられて、これがつくられていったのか、ということがもっと皆さんですね、伝えられてもいいのかな。

いわゆるストーリーと言いましょうか、そういうものがあるといいなと思いましたし、先ほどメモリアルホールは、実は設計されていたときに、私もちょっとだけ色々意見を言わせていただいたこともあったんですけども、改めて見ると、やっぱりすごい風格、空間なんですね。あの空間に合った色々なイベントっていうか、使い勝手がきつと、もっとあるんじゃないかなというふうに思いましたね。

それから、もちろん一番の目玉の開拓の村。これは一つ一つ本当に長い年月をかけてあそこに集められていって、それぞれのバックグラウンドにいろんなストーリーがあるんですね。

幸い私、大学にいた時に、例えば、小樽新聞社の解体前に調査をさせていただいたんですね。それから、農家の樋口家がこちらに移築される前に、図面を書いた記憶もあったりですね、僕の中では、ものすごい一つ一つ思い入りがあるもので、これを、やっぱりなんかこう、何度来ても楽しいと。

実は正直私、最初見たときですね、北海道の開拓の苦しみみたいなものが前面に出されて、ちょっと2回目は来たくないなって気もしたこともあったんです。ただ改めて、例えば、留学生を連れてくると、留学生たちは目を輝かせて、こんな北海道の住宅の歴史がいつぺんに見られるっていうのはすごい、とてもいい技術力だと言ってくれたりですね。

何か視点はちょっと変えることで、いろんなこう魅力っていうのは、まだまだできてきそうな気がしています。

それからやっぱり、長く歩くと、当然、食の問題がでてきて、確か昔、北海道開拓記念館のときに、2階のレストランで僕、食事を何度もしたことがあるんですね。

なんかあそこって、ちょっと一休みして、そして展示場にいったり、それから別の場所に行くということもあったんで、なんかこう開拓の村、こちら食のリンクするようなもの。

それからラーメンなんやらが良いのかも知れませんが、もうちょっと地域の特性みたいなものが出るような、そういった食の工夫みたいのですができてくるといいなと思うし。

三笠高校の高校生のようにですね、ものすごいアイデアで、しかも、言い方悪いですが、へんぴなところで、成功している事例もあって、地域の若い方々とのコラボみたいのをですね、やってくるといいかなっていうような気もします。

確か石狩では、藤の女子大とのコラボで、いろんな食品開発とかやっております。

何かやっぱり、これからは若い人たちをどういうふうに取り込んでくるかっていうのも、もう一つ大きなものなのかなっていうふうに思いました。

すいません。ちょっと限られた時間なので、なるべく皆さんに聞いてください。

(石森座長) 貴重なご意見をいただきまして、ありがとうございます。

ただいま、角委員から北海道記念塔の解体につきまして大変重要なご意見を提起していただきました。この問題につきまして、懇談会座長としてお願いがあります。皆様方にすでにご説明させていただきましてとおり、北海道は2018年12月に今回の懇談会のテーマであります

「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」を公表し、その中で百年記念塔につきまして「今後の老朽化の進展を完全に防ぐことは困難であり、利用者の安全確保や将来世代への負担軽減等の観点から、解体もやむを得ないと判断し、新たなモニュメントを設置することとします」という発展的継承案を提示しています。この百年記念塔解体案につきましては、すでに「北海道百年記念塔を守る会」や「北海道百年記念塔の未来を考える会」や地域住民から公開質問状や「記念塔の存続を求める署名」などが提出されています。そのために北海道は今後、記念塔視察の受入れや地域住民への説明会などを丁寧に行って、理解を求めていくことになっています。そのような事情がありますために、この懇談会ではあくまでも「ほっかいどう歴史・文化・自然『体感』交流空間構想」に基づいて、野幌森林公園エリアの活用イメージを議論することにいたしました。その点、何卒宜しくご理解をいただけますようお願いいたします。

続きまして菅井委員をお願いいたします。

(菅井委員) はい。お話をいたします。基本的には、天池さんおっしゃったこと、角さんおっしゃったことと相違はないんですけども。

個人的にはもともと総務省にいたので、道の駅をつくってたりとか、各市町村のアドバイザーをやって、企業誘致をしていたりするんですが、その中で圧倒的に抜けているのが二つ。

一つがマーケティング。

何となくやって企業は絶対来ないですし、隣にHTOの生川さんがいらっしゃるんですけども、なんとなくやっても、誰にやっているのか、わからなかったり、そうなると、当然お客様にも響かなかったりするので、やはりマーケティングというのは圧倒的に大事です。

先ほど実はそのアンケート調査票をちょっと見たりしていて、やっぱりこれ1枚でも、我々ですと、なんの目的でやるのかとか、どういうふうにデータを活用するのか、というのは非常に計算されている中でやって、そういったところのマーケティングというのは、圧倒的に必須なのかなと考えました。

もう一つが、おそらくこういったところを色々変えていく中で、大事なものはPMを設置しないとおそらく難しいのかなと。

やはりいろんな方々がたくさんいらっしゃって、いろんな方向性を決めるのは当然だと思うんですけども。おそらく、PMを立てて、必要なか、間違ったのか、動かしていかないと、結局バラバラ、カチャカチャするので、そこはおそらくPMを立てて、横断的なテーマ設定をもとに動かしていきながら、あとベクトルに向かって進んでいくというふうにしないと、きつとうまくいかないのかなと思います。

それで最後に、そのやり方としては、今まで例えば、アインホールディングスさんと一緒に日本で初めて薬局カード使ったりとか、先日は札幌市図書館と、それこそ日本で初めて、図書館とカフェを合体させたりとか、アインもここにできたんですけど、その時にはマーケティングもそうなんですけど、結局そのお客様、エンドユーザーのタッチポイントを逆算してサービスをつくっていくというのがあったんで。

よく企業の会議であると、企業の滲み出たような、何のための会議だったのかなみたいなものがよくある中で、必ず自分のルールとして決めているのは、エンドユーザーのタッチポイントから逆算するサービス。それにおける組織編成、単価とか。

そういったのは、エンドユーザーから逆算しないと、おそらく、あつてこないのかなと思います。

何を具体的にという訳ではないんですけども、そうすると今の中のいろんなルールとかがあつてないということが見えてくるはずだと思うんですけども。

天池さんが先ほどおっしゃった、多分あえて言わなかったと思うんですが、観光地ですか文化施設ですかって質問がある中で、おそらくさっきみんなが多分、今のお客様の求めているところと、ルールがあつてなかったりするところもあるので、そこは、一緒に見直していかないと、きつとうまくいかないのかなと感じました。

最後、もう一個ありました。あとは、生川さんがいらっしゃると思うんですけども、販路がすべてなんで、販路をちゃんとやる。

機構さんに協力いただいたりとか、近ツーさんに協力いただいたり、販路をしっかり持っていないと、絶対にうまくいかないの。

例えば、私ならですけど、さっき計算したんですけど、200万人札幌にいて、そのうちの何%かが、1~2%が何回来るかで計算すると、おそらく年間の来場者数、それで終わるん

で、これが現実的なところかなと思います。

よくカップラーメンの話为例に出すんですけど。カップラーメンって40億食ぐらい売れているんですけど、全日本スーパー協会がアンケートをとって、150人を対象になんですが、カップラーメンを1年間に1回食べる人って聞いたら15人しか手を上げなかったんです。つまり、カップラーメンって40億食っていいながら、1年間に食べている人っていうのは、そうのうちの国民の10%いるかいなか。2回食べている人っていったら3人しかいなかった。つまり、40億食っていうのは、全体の1~2%がめちゃくちゃ食べているだけなんですよ。これがスーパーヒットしている商品のマーケティングなんですよね。

先ほど言ったとおり200万人都市の1~2%をスペシャリピートさせる、こういうふうをクリアにマーケティングを見ていかないと、多分、うまくいかないと思います。

ただ今、変えるチャンスがあれば、変えられると思うんですね。色々協力できることはしたいなと思います。以上です。

(石森座長) ありがとうございます。

ただいま、菅井委員から販路の問題についてご意見をいただきましたので、北海道観光振興機構の地域観光部長を務めておられる生川委員にお願いいたします。

(生川委員) 若輩者ですが、今回、ご拝命いただきましたので参加させていただきました。ありがとうございます。

私ですね、石森様と一緒に、関西の出身でございまして、ちょうど昭和62,63年位に、ちょうど修学旅行で千歳に入って、真っ先に来たところが実はここなんですよ。

ちょうどお昼に、あの広い広場で弁当が手渡されて、そこで食べたっていうのが第1印象で、そこからずっと回っていったというのが実情なんですけれども、その当時も不思議な光景で、もし雨が降っていたら、どうしたんだろうなっていうのはすごく印象に残っております。

また、そのあと、色々あってですね、この北海道の方に来ることができて、このような仕事させていただいており、また、このような機会を与えていただいて、本当にありがとうございます。

先ほど来、皆様方からマーケティングとかですね、非常にもう、本当におっしゃるとおりでございまして、特に我々、私の方から、それと同じようなこと言うつもりはサラサラなくて、世の中的に、インバウンドで外貨を獲得するということで、一旦ちょっとコロナウイルスの関係でつまづいていますけれども、いろんな京都ですとか、場合によっては小樽とかですね札幌を含めて、観光の公害っていうのが非常に、あちこちで出てきている。

その中で、地元住民の方と、うまく交流といいますか、うまく回していきながら活性化をさせていくっていうことで非常に難しい問題だと思います。

おそらく美瑛あたりとか、そういったところで問題になって、よく取り上げられている問題だと思うんです。

中々それは解決先っていうのは、本当に地域住民の方と、或いはその施設の方と協議をして

いかないといけない分野かなと思っていました。正直、一つとして正解のものはないというふうに思っています。

もう本当に、皆さんがおっしゃっているように、マーケティング、ターゲットをしっかりとさせるってことがすべてだと思っている中で、今日はせっかく、皆さん、今後、課題となっている施設を見せていただきましたので、簡単にその部分だけ、直感的に思ったところを述べたいというふうに思います。

まず最初に、開拓の村ですね、こちらも本当に私たちも本当は、北海道に来て、まっさきにやっぱり招聘とか、いろんなメディアとか、よくインバウンドの旅行会社の方お連れして、ちょっとやっぱり食とかですね、それ以外の自然、温泉そういったところに案内しがちなんですけど、原点に立ち返って、やっぱりこの開拓の村、それからこの博物館、ここで歴史を知ってもらって、その上で、その認識をしてもらって、そこから道内のいろんなところに回ってもらおう。

これがやっぱり、理想かなっていうふうに思っていて、そこはすごく反省しておりますし、また帰ったら、私どものメンバーの方にもその辺を伝えていきたいというふうに思っています。

なので、特にインバウンドで言うと、最近で言うと、「映える」という言葉があるように、そのあたりの部分では、開拓の村っていうのは、先ほども、留学生の方も、建築の方で、すごく興味があるということなんですけど、空間に入ると、本当にインバウンドの方については、すごくうけるのではないのかなっていうと。あと、最近ですと、フォトウェディングも一時期ちょっと流行っていたんですけども、何か写真を、アジアの方は撮りたがるっていうところもあるので、そういったような展開も考えられるかなというところを思いました。

あと、広場のところにつきましては、やはり最近、キャンプが流行っているということで、中々それを開放するという、いろんな芝生を傷めるとか、色々問題が出てくると思うんですけど、これは、インバウンド、国内にかかわらず、すごく、これからのお客さんが交流を増しているところでは重要な要素だと思いますし、キッチンカーの開放というのも、一部分ではそういったお客様に対しての対応が必要になってくるのかというふうに思いました。

あと、博物館につきましては、本当に重厚感ある建物で、なおかつ、記念ホールについては、いろんな展開ができるかなというふうに思っています。

きっとミスとか、そういったところで、ユニークベニューの対応ができれば、本当に来ていただいた方へ、満足していただける施設だなというふうに思いました。

昨今、大阪とか名古屋ですと、名古屋城の直接、お城どうのこうのっていうことではなく、その周辺にですね、賑わいの創出ということで、そういった展開をされていて、決してそんな高いコストをかけて、私も一度見に行きましたけど、相当なコストをかけてやっているようなものじゃなくて、簡単に撤去できるというかですね、そういうようなものも最近流行っております。

また時間軸でいうと、ナイトタイムの部分についても、非常に重要だというふうに、消費の単価を上げるっていう部分では、世の中的には言われています。

ただ北海道の場合はですね、ここにきて、そこからっていうところを考えると、夜については何とも言えないんですけど、逆に朝、今、博物館とか、9時から5時までというふうに世の中の的に統一的になっていますけれども、例えば、それを、夏の間だけ早めるっていうふうな、そういう仕掛けもきっと必要になってくるんじゃないかなっていうふうに思います。

私、今事務所が北大の植物園のすぐ隣にあるんですけど、朝ですね、どうしても仕事を早く帰りたいがゆえにですね、朝7時に会社に入っているんですけども、欧米の方がですね、夏場ですと、あそこ開くのが9時なんですけれど、それを知らないで、たくさんの方が、植物園の入口のところにいらっしゃっているんですけど、そのあたりの機会の創出ってというのは、すごく感じている次第でございます。

ちょっと雑ばくな意見で、大変申し訳ないんですか。以上でございます。

(石森座長) どうもありがとうございました。

続きまして、先ほど北海道開拓の村をご案内いただきました中島委員にお願いいたします。

(中島委員) 中島です。私だけなんか当事者なので、非常にしゃべりづらいですけれども。かつ、私があまり数字を勘定できないので、予算垂れ流しているわけなんで、それはあまり強く言えないんですけれども。

ちょっと具体論になるかどうかかわからないんですけど、色々、観光か文化か聞かれたんで。

今は観光も文化も一緒なんで、よくおまえのところは観光施設だろうって言われるんですが、観光って遊びじゃないんで、身になるものなんで。

ちょっと、各論みたいですけど、千葉県浦安に浦安市の郷土博物館っていうのがあります。

浦安ってどんな街かって言ったときに、東京ディズニーランドがある街。ところが実際浦安っていうのはもともと何の街だろうったら海苔の街です。

そういうのを、自分のところの街を知るって言うのは博物館なんだっていうことでお願いして、浦安市の郷土博物館ってすごくおもしろいところなんですよ。

そういったところに、本当の浦安を知るために、僕みたいな北海道から千葉に行って勉強するっていうのが観光になった。

それで、この間、僕が行ったときにまじまじと思ったのは、外国に行くのに、どこに行ったら勉強できるのかって言ったら、日本っていうテーマパークに行ったら勉強できる訳じゃないですし、そしたらやっぱり博物館、ミュージアムで勉強して、その地域のことを知るというのがスタイルですね。

だから、東京ディズニーランドに行ったら浦安のことをしゃべるやつは誰もいないんですよ。

ですので、そういった場を、先ほどおっしゃったように、その博物館で若しくは美術館で、地域のことを知るということが観光なんだってことが、この頃になって開拓の村に来る欧米の方の姿を見て、我々、改めて勉強し直しているところです。

ちょっと今回、ウイルスをばらまいた、それはちょっと置いておいて、その欧米の方って

いうのはよく聞いてみると、もう十分に日本のことは勉強しているんです。

要は俺らは確認しにきてるんだっていう。その確認行為で、してきているっていうことに対して、最もその日本人と違って休み時間が短いわけじゃないですし、そういう使われ方をしていくのであれば、それといった、その観光か、文化か、教育かっていう議論はまったくナンセンスな問題だと思っています。

よく我々博物館でも、それは観光客向けですとか、地元客向けですとか、言うんだけど、やることが同じなので、ボールを投げることと同じことなので。

例えば、ここは北海道の厚別ですけど、厚別区の方に、北海道の生活文化を学ばせるためと、アメリカの人に学んでもらうのに、まったく同じボールを投げると。使うのは言語だけの違いだけの話だっていうように。

ただ、今までそれをやってきた中で、やっぱり致命的なのは、厚別の人、北海道の人が、我々に対してどのような要望をしているのか、期待をしているのかっていうことは我々がわかっていなかった。一方通行的なボールを投げ続け、要は無駄なボールを投げてしまったかなっていうのは自戒の念にしています。

ただその中で、言いたいことを言いますと、観光は別に、わざわざ議論するべきもんじゃないよっていうことと、あとは我々が、平成18年以来、指定管理者としてやってきた中では、余りにも制約がありすぎるっていうこと。

とにかく制約があるっていうことと、それから、ちょっと私、本には書いたんですけども、指定管理の負担金が上がったことは一度ないっていうことですね。

成果を出していても上がることはないっていうことになると、この指定管理者制度の中で、果たしてその優良な企業の方々と手を組んだりとか、若しくは企業の方々が指定管理をやらせようとしても、おおよそ、その仕組みがある限りは手を出せない。

その指定管理者制度そのもののあり方を本当は考えていただきたいと、指定管理者制度がコストカットではない。

そもそも平成15年の小泉内閣が指定管理者制度を導入したときには、利用者サービスという、これが一番だっていう。それを真に受けている訳じゃないですけど、コストカットではないと。

イギリスの小さな制度を日本でやるんだっていう。そんな人の元で支持を得たのが市場開発ということなんです。

ところが、それを、例えば、北海道みたいな若しくは地方みたいな財政が苦しいところでは、どこが所管しているのかはあれなんですけど、コストカット、とにかくコストがあった。そうなるとそのサービスの「サ」の字もできないというふうになります。

それで、指定管理者制度自体を、やはり、どのように活かしていくのかっていうことを考えていただかないと、中々今回議論しても、例えば今回の議論にすごく良いアイデアがあっても、やらせようとしても、管理者制度がそれをバリアとして、障害となるっていうことが、私は懸念しています。

ですので、我々法人でも、やりたいことがたくさんある、できるんですけども、それをやっ

てしまうと、また次のハードルがあるっていうことで、中々それは難しいのかなというふうに思っています。

最後なんですけれども、さっきちらっと言いましたが、とにかくすごい資源がたくさんあるっていう、宝がうじゃうじゃしているっていうのが、このあたり、特に開拓の村はそうですし。先ほど角先生がおっしゃった住宅の歴史がわかるっていうのは、まさしく我々もやっていることで、例えば、開拓の村では暖房の歴史がわかるとか。

昭和30年代の田中道政の時に、北海道型住宅を建てる、その過程が北海道でわかるとか、これ我々指定管理として学習支援をやってますけれども、そういうことが一つの博物館でわかってしまうんですよ。

しかも、自分が建物の中に入ってわかってしまうっていうところは、他の博物館ではないですよ。ですので、こんな資源があるかと。

ただ、先ほどニトリさんが小樽の活性化についてありましたけれど、小樽がなぜあんなったかといいますと、小樽マイカルができたときに、小樽の中心街から全部人がいなくなりました。

マイカルが破綻して、じゃあって時に、小樽が新しい資源をつくることはできないって。

じゃあどうすればいいのかっていったときに、観光協会とか立ち上がって、小樽には漁場建築が45もあるじゃないかっていうか、それを整備していけば重要な資源になるっていうことで、1棟ですけど、改築している。

そういった資源の見直してことを身近な人々に知ってもらえば、身近な人々がスピーカーになってやっていただける。

だからうちの場合、この頃少しパワーダウンしていますが、例えばボランティアしかり、それから、ここに来る子供たちしかり、あとは観光客しかり、それたちの毛細血管にどんどん広がっていくと証明されていると思うんですけども、そういうことで、資源は生まなくても、たくさんあるんだっていうことを理解して欲しいなと思います。

(石森座長) ありがとうございます。

ただいま、5人の委員の皆様方から貴重なご意見をいただきました。

刻々時間が過ぎていますが、ただいまの5人の委員の方々の発言の中で、特に菅井委員と天池委員からご指摘のありました「基本的に観光施設なのか、文化施設なのか」という点が重要です。先ほど、中島委員は「今は観光も文化も一緒」という指摘もありました。私自身もこの30数年間に亘って、観光と文化の関係を考え続けています。

かつては、自治体の行政分野において観光行政と文化財行政はしばしば水と油のように折り合いが良くない点がみられました。ところが、安倍長期政権は新自由主義的な考えに基づいて、「稼ぐ観光」や「稼ぐ文化」という骨太の方針を強く打ち出しており、近年の政府の観光政策や文化政策は大きな転換期を迎えています。

もう一つ重要な論点は「指定管理者制度」についてであります。

大阪市は2015年4月から指定管理者制度を活用した「大阪城公園PMO(パークマネジメン

ト法人)事業」を開始しました。公園の管理運営者である大阪市は指定管理料を支払わずに管理運営を指定管理者である民間企業(大阪城パークマネジメント共同事業体)に代行させています。

さらに指定管理者は大阪市に3億円以上固定納付金と変動納付金を支払うという協定を結んでいます。指定管理者は魅力ある施設の整備に約3年間で60億円を上回る投資を行って、大幅な入場者数の増加を実現しています。

しかもこの指定管理者制度を活用した「大阪城公園PMO事業」は、事業期間を20年に設定しています。言うまでもなく、大阪城公園は多くの歴史的文化遺産を擁する特別史跡である大阪城跡を含む公園なので、数多くの関係法令等による実現困難性を抱えていましたが、当時の橋下徹・大阪市長のリーダーシップによって実現された事業であります。大阪城公園PMO事業は指定管理者制度に基づいており、公民連携の面で新しい可能性を切り拓いたと評価されています。

北海道庁の場合には、指定管理者制度は行政改革局が担当していますから、まさに中島委員がおっしゃるように、一番大きな目的が経費節減(コストカット)ということですので、指定管理者は頑張れば頑張るほど道庁の負担金が減らされます。その上に、現在の北海道庁による指定管理者制度では事業期間が4年ですので、非常に限定的な事業展開にならざるを得ません。

(菅井委員) 先ほど観光と文化と言ったんですけど、基本的には同じだと思っています。私が言ったのは、いわゆる覚悟の問題というか、人を呼ぶのであれば、人を呼ぶルールにしなければいけない。

なので、それに即したルールを、道庁さんで、みんなで使わなきゃいけないという表現として。

観光と文化という分けではなく、そこを誤解のないように。

なので、それは、今の指定管理者制度の枠を超えたものをつくるのであれば、何度も言うようですが覚悟を持って、道庁さんも含めて進めなきゃいけないのかなという意味でした。

あとすいません、余談ですけど。記念塔何十億かかるんですけど、30億円。一般的な民間事業が30億円の営業利益を出すには、250億から300億円位。これを売りあげないと、30億というお金は生まれません。

なので、ここの利益が得られるのかという判断も、おそらく民間企業では30億っていうふうには考えないで、我々は、トップラインの売り上げの300億っていう数字が頭にある単位だと認識いただければというのが一つです。

(石森座長) 天池委員、よろしく願いいたします。

(天池委員) 先ほど菅井さんの方がおっしゃっていただきましたけど、私も観光、文化っていう部分が、別に分断されているというふうには全く考えていなくて、逆に一緒にならなきゃいけないなって

思っているんですけど。

さっき菅井さんは覚悟の問題とおっしゃっていただいたんですけど、本当にそこだと思いません。

ただ、我々ニトリホールディングスは民間企業ですので、ご存じの方もいらっしゃると思うんですけど、我々の考えとして、一番の社会貢献が何って言うふうに言われたときに、我々の会社の者ではですね、客数であると。

利用してくれるお客様の数が永遠に続けることが、社会貢献であるというところが、我々新入社員の時からずっとたたき込まれているわけです。

ですから、観光、文化づくりはどうしても良いんですけども、いかにこのエリアに活用してくれる人が集まってきて、毎年毎年それが増え続けていくという対策をどれだけ打てるかっていうことが、私の立場からするとすれば社会貢献じゃないかなというふうには思います。

ですから、例えばさっきの指定管理者制度にもありましてけど、どっかでそれが対策が打てなくなって、何もできなくなって、利用するお客さんの数が少なくなっていく、それは文化的なところでもいいし、観光的なところでも良いですが、少なくなっていくということは、もう社会から必要ないって言うふうに認識されてしまっていると思うんですね。

ですから、それは、何かやり方や仕組みを変えて、再投資ができるようにして、その時に、時代時代にあったようなやり方に変えることができ、それをつくることによって、毎年毎年少しずつでも良いからお客さんが増えていく。これはやっぱり、やらなきゃいけないかなと。

その仕組みの問題であれば仕組みを変えないといけないし、細かい次の対策であればそれをやらないといけないし、それを止めてしまうとおそらく、我々の考えとしては、永遠にお客様下がり続ける。

常に変化をしないといけないと我々考えていますんで、そこはやっぱり、やれるような仕組みにしなければいけないというふうなところですかね。以上です。

(石森座長) ありがとうございます。

観光と文化の関係性がいろいろと問題になっていますが、北海道観光振興機構のお立場で何かご意見がありますでしょうか。

(生川委員) うちも道の指針に基づいてやっているというところがあるので、そこには中々見えてこないんですけど、ただ、間違いなく国の方は、そこを結びつけて、或いはその国立公園だとか、そういったところ、今まで、環境省、文化庁、そことのタッグを組んだ支援制度っていうのが、今もう普通に出てきていますんで、間違いなく、重要な要素だというふうには認識します。

(石森座長) 角委員が館長をお務めになっている網走監獄は観光面でも大きく寄与し、文化の面でも大きく寄与していらっしゃるわけですが、どのようにお考えでしょうか。

(角委員) うちの場合はですね、実は個人的なあれになりますけど、副館長がものすごく企画ウーマンで。彼女が、実はもう、様々な企画を立ち上げてくれるので、私の役割は、それらの企画ではなくて、建物、重要文化財になるものですから、重要文化財をどう維持していったって、かつ建物自体の価値を社会に広めていくかということだと。

彼女がやっているもう一つは、その企画プラス建物の歴史みたいなものですね。非常に細かく説明できる説明員の方々を養成しているということ。

それから、女性の方ですから、昔、監獄で作られていたいろんな監獄飯ですとか、漬物だとかですね、そういうのも、実は自ら植えてですね、大根植えてやっていくという、そういう非常にそれは地域の子供たちも手伝っていただいたりして、そこで収穫したものを。

ですから、中々市販されないんですけども、そういうものをつくったりして、それに地域の人とか。

施設ですから一度来れば良いやっていう感じじゃなくて、リピーターの方がものすごく多いんですよ。

それは多分やっぱり、企画とのかかわり合いだと思いますし、もう一つ、実はうちの博物館は31年目になりますけども、造った時は本当に協会堂という講堂と、あと歴史資料館の2棟しかなかったんですね。それなのにその時からずっと、入場料1000円をいただいてですね。

来ると、建物増えているという、その動きのある展示が逆に、皆様方の興味を引かれていて。ですから、昔行ったよねって言うておきながら、例えば、去年行ったら全然違っていたというようなことで。

その一つの野外博物館でありながら、その動きがあるところ、そこがなんかこう、魅力になっているのかなっていうふうに思いますよね。

残念ながら修学旅行生はですね、実はどんどん減っています。実は網走市内、団体で受け入れる食堂がないとかですね、そういう別な理由で、中々受け入れられなくて、うちもその団体を受け入れるだけの食堂っていうのは中々できなくて、たまに頼まれてやるんですけど、でもやっぱり、中々従業員も集められないっていうことで。

今は本当に個人のお客さん、それでも24万人位に今なっているんですよ。インバウンドの方もおられますけど、それらも皆さん、基本的には、個人客が多くなりました。前は観光、団体だったんですけど。

ということは、個人が何度も来る、来てくれるっていうことは、そこに施設自体の魅力みたいなものがやっぱり、うちの副館長も含めて色々ですね、工夫をしているが結果として出てきているんだなというふうに思うんですね。

ですから、本当にもちろん重要文化財になったという、その建物の価値が上がっていくことで逆に、いろんな媒体に出る機会が増えて、NHKさんやら、民間の媒体が色々入ってくるし、なんととってもゴールデンカムイですね。

あのコミックが一つの契機になって、本当に若い方が来たり、それからコスプレで来てくれたりですね。

なんかそういう新しいなんか価値を、今の若い子達が見いだしてくれるっていうことと、う

まくマッチングできていて、そのあたり、これをやったら駄目とかっていうふうにしてないのが一つです。

うちは実は、年中無休で、職員は休みを回しているんですけども。

ですから、1月1日からやっていて、網走市って、どこ行く人もいない人はやっぱりうちの施設に来るんですよね、雪が降っていても。

それも一つのやり方としてですね、そんなにたくさんの方が来るわけじゃないんですけど。そういうところも、今、働き方改革で色々面倒なところあると思うんですが、逆にその、公開当初から年中無休っていうのが皆さん、わかっているんですが。各ホテルで今日行くところがないって言ったら、うちを紹介してくれるっていうですね。

(石森座長) 網走監獄は指定管理者制度で運営されているのですか？

(角委員) うちの財団がやっています。逆にいうと行政からお金をいただいていないので、完全に入場料だけでやっているんですね。

もちろん報告書出すとか、それから重要文化財なので、建物の耐震改修に半額、国から補助出ますけれども。

先日も、耐震改修の診断だけで6000万。そのうちの3000万をうちで。

(石森座長) あれだけの施設を自前でまかなっておられるのはすごいことですね。

(角委員) 自前でまかっています。

(石森座長) 北海道開拓の村で、歴史的建造物の分野における人材育成を行うべきであるという意見がありますが、角委員はその可能性をどう考えていらっしゃるのでしょうか。

(角委員) 基本的にはありうると思いますし、実は私、ヘリテージマネージャーの育成講座の会長もやっていますけど、実はプログラムの中に開拓の村で実習をさせていただいているんですよね。

例えば、いろんな時代の建物があるので、その建物の実測の仕方だとか、建物の価値をどういうふうに見たらいいかっていうことを示すのにすごく良いものがあるのですが、実はプログラムに入れさせていただいているんですが、ちょっと例えば、距離ですね。

中々やはり今、土日年間60時間の勤務があって、それで授業をやっているんですけど。道内の各地域から来られる方が、そういうプログラムを受けるために、60回で3万円なんですけども、彼ら来ると必ず土日ですから、札幌に泊まらなきゃいけないんですね。

泊まり賃が高いと。宿泊料が倍から3倍になっているもんですから。それは彼にとって本当に痛い。

例えば、開拓の村で宿泊もできて、そしてそこで授業ができれば、もうとてもですね、60時間の3分の2をここでやれるようなプログラムを立てられたら面白いよねって話は、まだ夢物語で

すけど、出ています。

うちのもう一つ、建築ヘリテージサロンという職人さんの会では、道南の木を使ったマサ。マサの開発を行うことによって、そういうものも開拓の村にもマサを使っている家がたくさんあるので。

僕たち子供の頃、マサを自分で直していたんで、そういうことが伝わっていくということが面白い展開になるんじゃないかなと。

いろんなアイデアは出るんですけど、その全体エリアとしてどうするかっていうところが、本当に何かこう、いくつかの項目がないと。個別はいっぱいアイデアが出てくるので。

そこのところが一番大変なのかなっていうふうに思います。

(石森座長) ただいま、北海道開拓の村に宿泊施設があると良いという話がありましたが、中島委員はどのように考えておられますか。また、レストランやミュージアムショップの充実化などについて、今後どういう可能性で考えておられますか。

(中島委員) 開拓の村のような建物を直す、改修する、修繕する、大工さんがいないですね。食べていけないからいないんですね。

だから、こういった文化財を、道内で道内の文化財を、道内の職人で任せられるようなマーケットを造っていかなくていけないと、常々、我々も古民家の方々とお話をしているんですよ。

ですので、それもただ、そういった狭い範囲じゃなくて、例えば、建築基準法にのっとらない建物を、例えば、若い夫婦がリノベーションして、なんか使いたいとか言っても、住宅金融公庫から金がでないとかっていう。なんかそれは解決されたみたいなんですけれども。

そうすると、そういったマーケットが広がってくれば、開拓の村とか、本州の野外博物館含めて、またその違う価値が出てくる。

そういうこと色々話してはいるんですけども、実際それをどうやって具現化するのか、どうやって可視化するのかっていうことなんです。

それらを、例えば、現実に戻って指定管理業務にしたら、それ勘弁してねという話になるので、そういう話をしていることもあります。

グズってそんなもの、そんなものと言いかた失礼ですね、グズにしても我々の方では、お客様が少ないという14万人とかって、ロット数が少ないというのが致命傷なんです。

ですから、例えばクリアファイルとってみても、1つ500円なんて高いだろうっていったら、ロット数が少ないから、そうになってしまうと。

それでも、うちの営業部長がすごく苦心して、いろんなものが安くなるようにして、オリジナリティあるものを販売しているんですけども、そもそもミュージアムショップまでいくところまで至ってない。

先ほどこちらの方の池田主幹がたくさんのマニアックな本があるよって、言っていましたけど、それを何人か買い求めたこともあったんですね。

開拓記念館に来ないと買えない本があるという時代もあったんですね。ただ、それを商売にす

ると商売にならないねってなったんですけど。

我々業界では、開拓記念館に行くと絶対ある本っていうがないというのも少し寂しいかな。

博物館におけるミュージアムショップって何かって言ったら、トーハクにあるような、ああい
うようなものをイメージするんじゃなくて、本当は、ちょっと需要は少ないかもしれないだけ
ど、先ほどおっしゃった1~2%の人でも来るっていうことが博物館にあり得るかなっていうの
は、この前の開拓記念館のマニアックな本、ちょっと思い出した次第です。

(石森座長) ありがとうございます。貴重なご意見をいただいているうちに、予定している時間が過ぎま
した。懇談会をお開きにしないといけません、野幌森林公園エリアの再生に向けた今後の展開
を考える上で大いに係わりのある重要な法律案が2月7日に閣議決定されていますので、最後に
紹介しておきます。それは「文化観光拠点を中核とした地域における文化観光の推進に関する法
律案」であります。国会での審議を経て、おそらく4月頃に法律が制定されてから、すぐに文化
観光拠点づくりに関する公募の開始が想定されています。そのために野幌森林公園エリアの再生
に向けた展開にとっても重要な係わりがあります。

安倍長期政権の下で、「稼ぐ文化」や「稼ぐ観光」という方向性が強く打ち出されていますの
で、交流空間構想につきましても、政府の動きに連動させて、様々な展開の可能性を探っていく
ことが大切になります。今回様々に議論していただきました「指定管理者制度」につきましても、
大阪市はすでに2015年に「大阪城公園PMO事業」というかたちで、指定管理者制度を活用
して大胆な事業展開を図っています。その当時の大阪市長であった橋下徹氏のリーダーシップで
数多くの困難を克服して踏み込んでいます。北海道においても、鈴木知事のリーダーシップの下
で大きな変化の生じることを期待しています。今回、ニトリホールディングスやアトリエ・モリ
ヒコなどの北海道の中で伸びゆく企業の方々に参画していただいていますので、交流空間構想の
実現に向けて、より良いかたちで「公民連携」が進展することを強く願っています。

いずれにいたしましても、本日ご多用の中を懇談会にご出席いただきまして、貴重なご意見を
提起していただきましたことに対しまして、お礼を申し上げます、第1回目の懇談会をお開き
とさせていただきます。

本日は真にありがとうございました。では、事務局にお返しいたします。

(所課長) 視察も含めて、長時間ありがとうございました。

我々の方でもう少し、論点といいますか、こうあるべきというのをお示しできれば、もう少し
意見交換できたのかなと思っております。

色々耳の痛い話もいただきましたが、もう少し我々の方で今回の意見をまとめまして、そし
てまた、我々としても具体的なイメージを固めていきたいと思っておりますので、場合によっ
ては、次回までの間に、一度例えば、アンケート調査といいますか、例えばどういったような方策
っていいですか、エリアっていうのを実行したら良いかっていうことも含めて、アンケート調査
なんかをさせていただくこともあるかもしれませんので、ご協力をお願いしたいというふうに思
っております。

いずれにしましても、そういったものも含めまして、4月にもう一度集まっていただきまして、意見交換、議論をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは引き続き、よろしくお願いいたします。

今日はどうもお疲れ様でした。

(以上)